

## 公民館における子育て支援講座に参加した母親の 心理的変容に関わる語りの特徴

岡村幸代<sup>i)</sup>・片山美香<sup>ii)</sup>

### Characteristics of Narratives Indicative of Psychological Changes in Mothers Who Participated in a Seminar on Parenting Support in Community Center

The current study used text mining to analyze the characteristics of narratives indicative of psychological changes in mothers who participated in a seminar on parenting support in community center. This study analyzed the narratives of 8 mothers who continued to participate in a seminar for mothers of children not yet attending kindergarten. In specific terms, frequently used words were analyzed, a hierarchical cluster analysis was performed, frequently used words were classified based on constructs of a scale to measure early childhood parenting, key words were analyzed based on a categorization of mothers' experiences, and words indicative of psychological changes in mothers were analyzed. Results of those analyses indicated that seminar participation had a positive effect not only on mothers and children but also on families as a whole, that contact with other mothers and their children and instructors led to less of a sense of isolation and it taught parenting behavior, and that seminar participation improved the mother-and-child relationship and it led to a sense of personal growth. Results suggested that an intervention takes a certain amount of time to produce psychological changes in mothers. Results also suggested that continued experiences as a parent and child, a child's growth, and interaction with others are some of the factors leading to those changes.

#### I. 問題と目的

本研究では、公民館における子育て支援講座（以下、講座）に子どもとともに参加した母親へのインタビュー（以下、面接）を量的に分析し、母親の心理的変容に関わる語りの特徴について検討する。具体的には、未就園児対象の講座に継続参加した母親の語りを、テキストマイニングによって量的に分析した後、語りの特徴や心理面での時間的変容、及びその要因について検討し、望ましい支援の方向性について考察する。

平成27年度に「子ども・子育て支援新制度」

（内閣府、2017a）が始動し、ようやく地域の子育て支援が総合的に推進されてきている。公共施設や園など身近な場所で子育て支援事業が実施されており、地域子育て支援拠点事業の実施数は、平成21年度の5,199から平成28年度は7,063まで増加し（厚生労働省、2017）、親子の交流や育児相談の場の更なる量的拡充が目指されている（内閣府、2017b）。家庭教育支援の面からは、平成29年に「家庭教育支援の具体的な推進方策」として、「全ての親の育ちや学びを応援するための方策」や「家庭教育支援のための方策」が立てられた（文部科学省、2017a）。地域の人材や専門家で構成された家庭教育支援チームの数が平成23年度の278から平成28年度には616に増加する等、全国各地で取組が拡大している（文部科学省、2017b）。

i) 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科

ii) 岡山大学大学院教育学研究科

地域での支援の場の一つである公民館は、中学校ないし小学校の通学区域に設置されているため、親子が徒歩か自転車で気軽に通うことができ、地縁が生まれやすい利点がある。その数は実に全国で14,171館に及ぶ(平成27年度)。平成26年度の学級・講座の開設状況では、「家庭教育・家庭生活」は72,382講座が開設されている。「家庭教育・家庭生活」講座のうち、「育児・保育・しつけ」は15,282講座にのぼり(総務省、2017)、先駆的な家庭教育支援事業も報告されている(室谷・中山、2013)。しかし、地域社会の繋がりの希薄化や、子育ての悩みや不安を抱えたまま保護者が孤立している現状(文部科学省、2017a)、児童相談所における児童虐待相談の対応件数の急激な増加等、家庭教育は依然として困難な状態が続いている。このような中で、地域における具体的な取組の手順やモデルを共有していくことが課題(文部科学省、2012)として残されている。

支援の内容や方法に関する課題として、小川(2014)は、母親への支援の実践自体は豊富にあるにも関わらず、その方法が明確でないのは、母親への支援が調査や分析を経て、ロジカルに捉えられることが十分でなかったと指摘している。また、子育て支援の効果や評価に関する研究は少ない(名須川・楠本、2011)ことや、家庭教育問題を公的な問題として学問的に論じ探究することの必要性が述べられている(佐藤ら、2016)。これらの知見からも、研究による分析を踏まえた理論的かつ現実的で取り組みやすい、汎用性の高い方法を構築し、支援の質の強化に繋げることは喫緊の課題である。

子育て支援の効果について検証した研究として、例えば、千葉ら(2008)や岡村・平松(2013)では、講座への参加が子どもの成長だけでなく、ともに参加した母親の気分状態に有意な改善が認められる等母親にとっても意義ある活動であることが示されてきた。継続的な講座への参加による母親の心理に着目した研究では、1年間の子育てサークルへの参加により母親の不安感が有意に軽減

されること(横川・小田、2012)、幼稚園での3年間の親育てプログラムで、4歳児から5歳児時において子育て意識尺度の下位尺度である「育児責任」が有意に高くなり、親としての育ちが示唆されること(名須川・楠本、2011)、母親の子育て観が参加当初の緊張感を伴うものから無理せず自然なものへと変容し、曖昧さへの耐性も生じること(岡村・湯澤、2014)等、講座に一定期間、継続的に参加することに母親の成長を支える効果があることが示されてきた。

講座に継続参加した母親の内的体験に着目した研究では、母親の子育て意識が4つの段階を経て変容することが示された。特に、子育て意識に関連すると考えられる母親自身の講座における体験の類型として、講座の活動に3か月から半年で慣れる「早期親和型」(8名中6名)、緊張感を持ちながら参加を続け、活動に慣れるまでに1年から2年程度かかる「緊張持続型」(8名中2名)の存在が明らかになった。これらのことから、講座への継続参加の意義、体験の類型別に効果的な支援を見いだすことの必要性が示唆された(岡村、2016)。

残された課題として、講座に継続参加した母親の心理的変容に関わる語りについて、探索的・定量的な分析を試み、その特徴を緻密に拾い上げ、新たな知見を得ることや、支援の効果性や妥当性を検証することが挙げられる。

子育て支援の講座や活動を利用した母親の自由記述や面接を分析した研究は散見される(名須川・楠本、2011; 頭川・北山、2011; 中谷、2014)が、講座に継続参加した母親の面接データを用いてテキストマイニングを行い母親の語りの特徴を分析した報告は認められない。

そこで本研究では、量的分析法の一つとして、分析者の主観を排し、統計学的手法により客観的に有用な情報も捉えることが可能なテキストマイニングソフトであるKH Coder<sup>1)</sup>を援用することで、語りの特徴を図や表として可視化するとともに、分析結果から原文を辿ることで質的な分析も

行い、語りの質への理解を深めることとする。

具体的には、未就園児を対象とした月2回程度の講座に継続参加した経験がある8名の母親に面接を実施し、参加当初1～2年の経験を中心に面接し得られた語り（岡村、2016）を分析する<sup>2)</sup>。頻出語の抽出、階層的クラスタ分析の後、「親性」による頻出語の分類、講座への親和性の違いによる体験の質の比較検討を行い、継続参加の意味を明らかにするため、時間的変容を表す語に着目した分析を行う。「親性」とは、「母性」「父性」にかわり提唱された用語（汐見、1989）であり、「すべての人がもっているものであり、男性と女性に共通する、自己を愛し、尊重しながら、他者（子ども）に対しても慈しみやいたわりをもつという性質である。ライフステージとともに発達していくものであり、妊娠・出産・育児期では、子どもに対して保護や育成という能力で発揮される。」（大橋・浅野、2010）と定義される。語りを親として以外の役割からも捉えるために、大橋・浅野（2010）らの「親性尺度」を援用した。

このような分析を通して、講座に参加した母親の心理的変容の特徴を量的な視点から明らかにし、母親の心理的変容の特徴に基づいた支援方法の端緒を得ることが本研究の目的である。

## II. 方法

### 1. 調査対象及び時期

調査対象は、市立公民館主催の講座に継続的な参加経験のある8名の母親（専業主婦）とした。2013年8月～2015年3月に第1著者が個別に面接を実施した。講座の対象者は未就園児と母親である。半年ごとの申込み制であり、活動は月2回程度、1回の活動時間は90分、15組前後の参加である。内容は、身体を使った遊びや、お絵かき、工作、歌、絵本、季節の行事等である。保育士の資格を持つ講師の指導のもと、親子で様々な遊びを行い、活動の最後には母親たちが話をする時間が20分程度設けられている。

### 2. 手続き

面接の実施は、講座修了後もしくは、講師自宅にて個別に実施した。面接に際し、プライバシーを厳守すること、面接の内容を研究以外に使用しないこと等を説明し、対象者の許可を得た上で録音した。事前に、面接の時間は40分程度である旨を案内した。調査内容は、講座に参加するきっかけや、参加開始時の子どもの年齢や参加期間を尋ねた後、講座に参加してからの母子の関わりや母親の心境の変化を中心に自然な会話となるよう努め、語りを促した。

### 3. 面接データの分析

テキスト分析は、KH Coder (Ver. 2.00f) (樋口、2014) を用いて行った。具体的には、まず、面接での全ての発話をテキストファイルに電子化した。次に、「講師」や「○○先生」等講座の講師を意味する単語を「講師」に、「子」「長女」等を「子ども」に統一するなど、語の置換作業を行った。「する」「うん」等のあまり意味をなさない語や、「思う」等の具体的内容を想起しない語は、抽出しない語として処理した。さらに、「ママ友」「児童館」等は一つの語として強制抽出した。上記の作業の後、頻出語の抽出及び内容の分析を行った。

## III. 結果と考察

8名の母親の面接時間の平均は約33分であった。面接時間の個人差は生じたが、質問への回答は得られたので、全てを分析対象とした。

### 1. 母親の心理的変容に関するキーワードの抽出

総抽出語数は20,990語、分析対象として認識された語は6,495語となった。図1に頻出語上位40語と出現回数を示す。

出現回数が最も多い語は「子ども」である。子育て中の母親の対人関係に着目した先行研究（片桐ら、2017）の結果とも一致するものであり、面接の内容から考えても当然と言えよう。人を示す

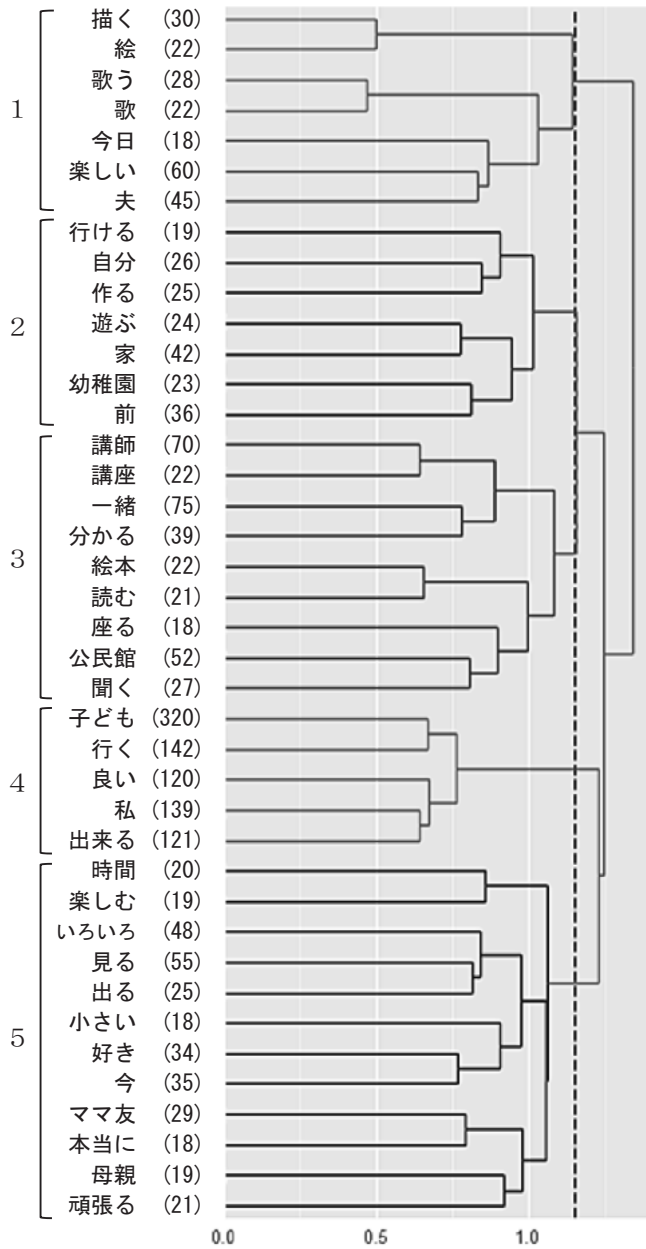


図1. 母親の語りにおける語の結び付き

注) 括弧内の数字は、語の出現回数を表す

語は「子ども」に次いで、「私」「講師」「夫」「ママ友」「自分」「母親」の順で多く、世帯外で母親と関わりのある人を示す語も見受けられた。場所を示す語は、「公民館」「家」「幼稚園」「講座」の

順で多く、子どもと過ごす場所が多く出現した。講座や家庭等での遊びについては、「歌」「絵」「絵本」が検出された。

時間的な変容を表す語として、出現回数10回以

上の語から「出来る」「分かる」「時間」「行ける」「成長」「離れる」「時期」「最後」「今まで」「段々」「変わる」の11語を選出した。

## 2. 階層的クラスタ分析による頻出語の分析

頻出語を用いて階層的クラスタ分析を行った。分析法は、最も良く用いられる凝集型階層的クラスタ分析法(齋藤・宿久, 2006)の中でも、一般的なWard法とし、集計単位は文、最小出現数は18として分析した。デンドログラム(以下、樹形図)を図1に示す。樹形図では、図の左側から語と語が結び付きの強い順に結合していき、最終的に図の右側で一つのクラスタを形成する。このため、結合の過程も解釈が可能である。語の前後の語りを確認した上で、解釈のしやすさを考慮し5クラスタ解を採用した。クラスタ名は第1クラスタから順に「家族の変化」「子どもの成長」「講座での学び」「子どもとの関わり」「他者との関わり」とした。表1にクラスタ名と語りの典型的な例を示す。クラスタの階層構造をみると、第2・第3クラスタが最も結び付きが強く、次いで第4・第5クラスタが強かった。第2・第3クラスタの結び付きと抽出語前後の文脈から、母親は、講座での継続的な活動を通じて子どもの成長を感じることが示された。第4・第5クラスタからは、母親は他者との関わりの中で育児行動を学んだり情報収集したりすることにより、子どもとの関わりを深めていることが示唆された。

第1クラスタは、「家族の変化」である。具体的には、講座参加後の夫や子どもの変化に関係する。主に2つの文脈で語られており、「絵」や「歌」といった講座での活動を家庭で子どもが行うようになる等の「子どもの変化」と、子どもの変化をきっかけにした「夫と子どもの関わりの増加」が典型的な語りの内容である。面接の内容を精査したところ、夫と子どもの関わる時間の増加により、母親が(講座の参加者ではない)きょうだい児と接する機会が増えたとの語りも確認された。父親の育児・家事参加度の高さは母親の否定

的感情の軽減に繋がり、それと同時に父親自身の子どもへの肯定的感情が強まること(柏木・若松, 1994)が明らかにされている。本研究ではさらに、講座への参加の効果が父親やきょうだい児も含めた家族に波及し、家族の関わりをより肯定的なものに変容させる契機となることが示された。

第2クラスタは、母親からみた「子どもの成長」である。講座及び家庭での「子どもの成長の実感」と、幼稚園等近い将来の「子どもの成長の見通し」からなる。「子どもの成長の実感」として、家庭と講座で共通していることは、子どもが「自分」から活動するようになっただけでなく、相違点は、家庭で子どもが講座での遊びを再現する姿を母親の楽しみとして語った(8名中5名)が、講座で子どもが集団に入って活動する様子については緊張感や安心感を交えて語った(8名中4名)ことである。講座に参加する動機として「集団生活に慣れさせたい」「幼稚園が不安」等があり(岡村, 2016)、育児の役割と責任を1人で引き受けている母親の負担感(松田, 2008)がうかがえた。

第3クラスタは、「講座での学び」である。講師からの助言や育児行動の学び等「講師からのサポート」や、親子で活動をとみにした「体験からの学び」、絵本の読み聞かせ等講座の「活動への満足感」からなる。第1クラスタで語られていた「歌」や「絵」は、子どもや夫の様子等家庭と結び付いて語られたが、第3クラスタの「絵本」は、講座の場との結び付きが強いことが分かった。第2・第3クラスタは近接しているため、講座での活動のうち、絵本の読み聞かせを活動に取り入れることは、母親が子どもの成長を実感できる等、母親の心理的変容を促す可能性が示唆された。

第4クラスタは、「子どもとの関わり」とした。母親が「講座に行くという行動」を選択し、継続して通う中で、「子ども」だけでなく、母親としての「私」にも「出来」なかったことが「出来る」ようになったり、子どもからの働きかけを感じ取って母親が成長したり「子どもとの関係」が深まる様子と経緯が語られた。第4クラスタは、出

表1. クラスタと語りの典型的な例

クラスタ名 及び 抽出語を含む文脈の意味	語りの例
1. 家族の変化	
子どもの変化	「(講座の活動を) 自分で家でやるようになったんですよ。自分で始めだしたんですよ。そしたらそこから色の <u>楽しさ</u> と <u>絵の楽しさ</u> と、工作をすることの <u>楽しさ</u> がいつべんに来て。」
夫と子どもの関わりの 増加	「 <u>下の子と夫</u> は <u>ブロック</u> 作って、 <u>私とお姉ちゃん</u> は <u>クッキー</u> 作って、それぞれに <u>楽しい時間</u> を。上手く回ようになりましたね。」
2. 子どもの成長	
子どもの成長の実感	「最初はもう、ママママで離れなかったんですけど全然。それが段々、 <u>前</u> においでと言ってもらったら <u>自分</u> で <u>自発的に</u> <u>行ける</u> ようになったので、それはすごい成長だなと思います。」
子どもの成長の見通し	「切り替えが <u>幼稚園</u> に入る <u>前</u> に出来るようになった。」
3. 講座での学び	
講師からのサポート	「 <u>講師</u> のところに行ったら、こういう歌を歌ってあげれば良いとか、こういう <u>絵本</u> をこういう風に <u>読</u> んであげれば良いとか、そういうことが <u>分</u> かっていなかった訳でないけど出来なかったから。」
体験からの学び	「 <u>母親</u> も <u>一緒</u> にしてくれないと(子どもは)しないんだと思って、いきなり、はい来なさい、 <u>座</u> って見なさいじゃ絶対出来ないと思ったんよ。」
活動への満足感	「 <u>絵本</u> とかも、 <u>座</u> ってちゃんと <u>聞</u> けるのって。上の子どものときは <u>読</u> んであげてもちゃんと最後まで <u>聞</u> けなかったのが、 <u>公民館</u> で <u>皆座</u> って <u>聞</u> くじゃないですか、あれって大事だと。」
4. 子どもとの関わり	
講座に行くという行動	「他の母親たちがどうしているのかを見たいし、 <u>子ども</u> は <u>どう</u> いう風に大きくなっているのかを見たいし、というので(講座に) <u>行</u> きました。」
子どもとの関係	「(子どもが) <u>講座</u> に <u>行</u> って、皆と <u>関</u> わる <u>こと</u> が <u>出</u> 来て、 <u>私</u> と <u>関</u> わる <u>よ</u> うになれて、 <u>マル</u> も <u>ら</u> って <u>頑</u> 張 <u>っ</u> て。」
5. 他者との関わり	
体験の継続による変化	「 <u>時間</u> も大事。 <u>好きなこと</u> を <u>ち</u> よつと <u>ず</u> つ <u>増</u> やしていったから良かったのかな。 <u>好</u> きになろうとか <u>楽</u> し <u>も</u> う <u>じ</u> ゃなく、 <u>自然</u> に <u>楽</u> し <u>も</u> う <u>っ</u> てなってきた。」
他者からの影響	「 <u>いろいろ</u> な人たち、 <u>いろいろ</u> な子どもたち、 <u>親</u> との <u>接</u> し方、または <u>講師</u> と <u>子ども</u> との <u>接</u> し方、 <u>いろいろ</u> <u>見</u> てきて、 <u>私</u> の中で <u>こ</u> う <u>じ</u> ゃ <u>い</u> け <u>な</u> い <u>の</u> かなってというのが、 <u>そう</u> じ <u>ゃ</u> な <u>い</u> の <u>か</u> な。」
ママ友の支え	「 <u>私</u> の場合 <u>転</u> 勤族なので、 <u>行</u> った <u>先</u> 行った <u>先</u> で <u>ママ友</u> を作 <u>っ</u> て <u>じ</u> ゃ <u>な</u> いと、 <u>本</u> 当 <u>に</u> 一人にな <u>っ</u> ち <u>や</u> う <u>の</u> で。」

注) 下線は、各クラスタにおける頻出語を表す

現頻度上位5位の語が集まっており、母親の興味関心の高さが示唆される。子どもの育てにくさを感じている母親や、子どもからの働きかけを感じ取りにくい母親は「子どもとの関係」を作ることが困難なため、丸谷（2016）も指摘するように、親としての有能感を持ってないままに自分を責める可能性が考え得る。母親が子どもと応答しやすく、子どもの成長を捉えやすい支援プログラムの実施が望まれる。

第5クラスは、「他者との関わり」である。母親が講座で他の母子の様子を見る等「他者からの影響」や、ママ友と話して孤独感が少なくなる等「ママ友の支え」など、母親と間接的ないし直接的に関わる他の参加者の影響が示された。自覚されているかどうかにかかわらず、母親たちには心理的サポートを求める深い思いがあり、それが「情報交換したい」「他の母親たちの実際の様子を見たい」という強い欲求となって現れる（Stern, D. N., 1998）とされる。講座に参加する母親が、他の母子の実際の様子をよく見たり、気軽に情報交換できる機会を作る等、母親が心理的な安定を得ながら社会に繋がることができるよう活動が望まれる。

### 3. 親性尺度による頻出語の分類

図1に示した頻出語（総出現数1,949語）について、育児に関連した感情や認識を測定する「親性尺度」の下位尺度（大橋・浅野、2010）である、「親役割の状態（親役割の満足感、育児への関心等）」「親役割以外の状態（親として以外の自分への満足感、社会との関係等）」「子どもへの認識（子どもへの愛着、子どもの様子の理解等）」に、「その他」を加え分類を試みた。無作為に選んだ30語について保育を専門とする大学教員1名に分類を依頼し信頼性を検討したところ、十分な値が得られた（ $\kappa$ 係数=.79）。このため、全ての頻出語について分類を行ったところ、表2に示すように「親役割の状態」（812語）、「親役割以外の状態」（205語）、「子どもへの認識」（720語）、「その他」

（212語）に分類された。

「親役割の状態」に分類された語の占める割合の高い順から4語挙げると、「一緒」「歌う」「歌」「いろいろ」となり、親としての認識や行動を示す語が主である。「子どもへの認識」は、「自分（子ども自身）」「絵」「本当に」「座る」となり、子どもの成長や子ども自身の興味を示す語からなる。「親役割以外の状態」は、「ママ友」「夫」「家」「聞く」であり、人との繋がり等、親として以外の生活を示す語が見受けられた。

### 4. 類型による特徴語の分析

先行研究（岡村、2016）で得られた母親の体験の類型である、「早期親和型」「緊張持続型」による特徴語を抽出した。表3に類型による特徴語を表す。「早期親和型」は、Jaccardの類似性測度の大きい語から、「子ども」「出来る」「行く」「良い」「私」「講師」「楽しい」「一緒」が抽出され、人を示す語や活動への親しみを表す語が多く見受けられた。「緊張持続型」は、「前」「出る」「頑張る」「入る」「多分」「忙しい」「一番」「子育て」が抽出され、人間関係や体験の楽しさを直接的に示す語は見受けられず、講座の活動中に母親から離れて「前」の方に行こうとしない子どもの様子や、活動に対する「頑張り」が特徴であった。

テキストマイニングでは、文章を語の最小単位である形態素に分解して抽出するため、語が肯定的もしくは否定的な意味のどちらで使われているかは抽出語を見るだけでは判断できない。このため、分析の際は面接データに戻り、語の使われ方を調べる必要がある（コンコード分析）。特筆すべきであったのは、「早期親和型」の特徴語である「出来る」（「早期親和型」での出現回数102回）である。「出来る」を文脈から見ると、講座参加前ならびに参加当初の母子の状態を示したものは15回出現し、このうち肯定的な意味での「出来る」は2回に留まり、否定が大半を占めた。一方、講座参加後は56回出現し、肯定は50回にのぼった。母親の不快感情のもつ肯定的な意味を記述的

表2. 親性尺度を用いた頻出語の分類

抽出語	文脈から捉えた抽出語の意味				抽出語	文脈から捉えた抽出語の意味			
	親役割	役割外	子ども	その他		親役割	役割外	子ども	その他
子ども	88	11	170	51	聞く	7	7	12	1
行く	77	7	34	24	自分	2	0	24	0
私	92	24	23	0	作る	9	4	8	4
出来る	40	12	62	7	出る	8	4	7	6
良い	67	8	32	13	遊ぶ	5	2	12	5
一緒	62	2	6	5	幼稚園	6	1	7	9
講師	48	8	8	6	歌	16	2	2	2
楽しい	20	5	33	2	絵	2	1	19	0
見る	28	2	15	10	絵本	11	0	10	1
公民館	16	2	28	6	講座	12	2	4	4
いろいろ	33	10	4	1	頑張る	12	0	5	4
夫	6	24	11	4	読む	8	1	9	3
家	9	11	20	2	時間	12	1	6	1
分かる	18	2	13	6	楽しむ	9	2	8	0
前	6	1	15	14	母親	9	0	5	5
今	14	3	12	6	行ける	6	1	11	1
好き	5	7	19	3	今日	6	2	10	0
描く	13	0	17	0	座る	4	2	12	0
ママ友	0	29	0	0	小さい	2	3	10	3
歌う	22	0	4	2	本当に	2	2	13	1
					計	812	205	720	212

注) 二段目の「親役割」は親役割の状態、「役割外」は親役割以外の状態、「子ども」は子どもへの認識を示す

に検討した研究では、母親の不快感情を契機として子どもの育ちや母親自身の関わり方を振り返り、子どもへの見方や関わり方の安定や修正を図る(菅野、2001)ことが示されている。「出来る」の分析からも、講座への参加が、母親が子どもや自身について振り返る過程を支え、子どもとの関係を改善する役割がある可能性は否定できない。

### 5. 母親の心理の時間的変容を表す語の分析

頻出語から選出した時間的変容を表す11語について、語の前後の文脈を加味し、母親の心理の時間的な変容を表す語として「出来る」「分かる」「時間」「成長」「時期」「段々」「今まで」「変わる」

の8語を選択した。表4に母親の心理の時間的変容を表す語と語りが示す時期、及び語りの例を示す。これらの語は、母親の子どもへの関わり方の変化や、子どもや子育てに対する母親の考え方の変容としても語られていた。変容に繋がる直接的な要因として、継続的な親子での体験、子どもの成長、他の母子や講師との交流が語られた。

8語の総出現数は計244であり、それらすべての文脈を精査したところ、講座参加後に母親の心理的な変容が生じた時期が確定もしくは推定できた語は39回出現した。これらの語について、変容が生じた時期で分類したところ、参加直後が1回、約3か月以内が5回、半年以内は13回、半年以上



表3. 母親の類型における特徴語

早期親和型		緊張持続型	
特徴語	Jaccard係数	特徴語	Jaccard係数
子ども	.400	前	.108
出来る	.378	出る	.088
行く	.317	頑張る	.080
良い	.316	入る	.080
私	.313	多分	.080
講師	.238	忙しい	.075
楽しい	.211	一番	.071
一緒	.211	子育て	.070

表4. 時間的変容を表す語と語りが示す時期、及び語りの例

時間的変容を表す語	語りが示す時期	語りの例
出来る	3か月	「私の中で、幼稚園でお友達作ったりして、先生の話も聞いて、 <u>出来る</u> かなっていう安心感がありました。そうです。大丈夫かなと思って。」
今まで	1年	「 <u>今まで</u> は、ダメよって言うまでの時間が早かった気がするんですよ。それがちょっとだけ長くなったような気がします。」
段々	1年半	「最初は行く度に、(母親も子どもも)今日のイベントこれ、はあ疲れたって帰ってきてたと思うんよ。うん。けど、行っても緊張しなくなつて。 <u>段々</u> そう緊張しなくなつて。」

注) 下線は時間的変容を表す語に付した

経過したものは20回にのぼることが明らかになった。このことから、母親自身の心理的な変容には複数回、継続参加することの重要性が示唆され、3年間の子育て意識の変容を調査した先行研究(名須川・楠本、2010)の結果を支持するものであった。先行研究(岡村、2016)では、母親の子育て意識の時間的変容過程は「Ⅰ：子育て支援講座の利用を考える段階」「Ⅱ：他者に支えられながら参加を継続する段階(早期親和型は3か月から半年、緊張持続型は1年から2年)」「Ⅲ：講座や家庭で子どもと一緒に活動する段階」「Ⅳ：講座に余裕を持って参加する段階」で示された。上述の、講座参加後に母親の心理的な変容が生じた時期が確定もしくは推定できた語(39回出現)を

各段階の時期と照合した結果、段階Ⅱが22回に上り最多であった。「出来る」(段階Ⅱで15回出現)では、他の母親を見て「こういう風に言ってみたら(我が子が)出来るんだというのが分かって」等、他の母親の子どもへの関わり方を取り入れ実践し、これまでと違う子どもの変化の手応えを得た姿や、「私も一緒に成長出来た感じが嬉しかった」という講座に参加した結果としての語りがあった。これらの語りは、金岡(2011)が育児に対する自己効力感(Bandura, 1977)を高める先行要件及び結果として挙げた、「代理経験」や「結果としての心理的反応」と捉えることもできる。母親が講座に参加して新たな子どもとの関わり方を体得し、子どもを変化や成長に導くことが

出来るようになった自分を肯定的に捉えられるようになったため、自己効力感を抱けるようになり、母親の自信に繋がる心理的変容を促進したと考え得る。

#### IV. 総合的考察

##### 1. 母親の心理的変容に関わる語りの特徴

本研究では、講座における母親の心理的変容の特徴を捉えるために、テキストマイニングを用いた語りの量的分析を行った。階層的クラスタ分析からは、講座への参加により夫だけでなくきょうだい児を含めた家族全体に影響が及ぶことが示された。また、母親はママ友や講師等と接することにより、孤独感の減少や育児行動の学びが生じ、母子の関係の改善や母親自身の成長の実感を得ることが示唆された。親性尺度による語りの分析においても、「親役割以外の状態」である、ママ友をはじめとした他者との関わりを示す語りが認められた。母親が講座に継続的に参加することによって、母親自身の対人関係も広がり期待できる。時間的変容を示す語りの分析では、母親の心理的変容には時間を要しその多くは半年以上であることから、継続的な支援の必要性が示唆された。

##### 2. 母親の心理的変容に基づく子育て支援の実践

筆者らは、母親支援の実践開発として、実施が手軽で活動に取り入れやすい子育て支援プログラムの構築を目指している。今回の研究で明らかになったことを踏まえ、母親の心理的変容に基づく支援の在り方について考察する。

先行研究の質的分析(岡村、2016)と今回の分析の照合により、母親の心理的変容を示す語りは、他者に支えられながら参加を継続する段階Ⅱ(岡村、2016)での出現回数が最多であった。心理的変容を示す語りのなかで最も多く出現した「出来る」は、階層的クラスタ分析では第4クラスタ「子どもとの関わり」に配置され、第5クラスタ「他者との関わり」と結びつきが強い。先行研究と今回の研究結果を総合すると、母親の心理的変容は、

他者との関わり支えられながら参加継続する段階Ⅱにおいて、他の母親やスタッフの子どもとのやり取りを参考に我が子と関わったところ、親としての自己効力感の向上等として見いだされた。このことから、より効果的な支援として、母親が他の母親やスタッフと繋がり安心感を得るなど情緒的支援(宗像、1996; 金岡、2011)を感じながら、母親自身が具体的で達成可能な行動目標を設定し「出来る」体験を重ねていく過程に対し支援をすることも、心理的変容に促進的に働き母親の成長に寄与すると考える。

頻出語の中で講座の活動内容を示す「歌」「絵」「絵本」のうち、「絵本」は講座と結び付いて語られた。家庭での幼児への読み聞かせに対する母親の考えについて調査した研究では、母親は「空想・ふれあい」という読み聞かせの過程で生じる内生的意義を重視することが明らかにされている(秋田・無藤、1996)。本研究で対象とした講座は、毎回集団での読み聞かせを取り入れている。講座では母子ともに聞き手であるため、上述の研究と単純に比較はできないが、子どもが参加回数を重ねる中で「座って読み聞かせが聞けるようになる」ことに意味を見出した母親が8名中5名にのぼり、絵本を通じた親子の触れ合いに関するエピソードを語った母親はいなかった。実際に講座での読み聞かせの様子を観察すると、母子で並んで同じ絵本を眺め、その内容について言葉を交わしたり、母親が子どもの表情を見たり、子どもが母の視線を追う姿を見ることも多い。このような共同注視の出現は、子どもが「象徴を共有し、言語を使用し考えるようになっていくための基盤となるもの」(北山、2005)であり、発達にとって重要な意味を持つ。また、講座で絵本の読み聞かせを聞いた母親の気分や感情には肯定的変化がある(岡村・平松、2013)ことも明らかにされており、母子にとって絵本の読み聞かせの意義は大きい。絵本の読み聞かせを、話を座って聞く練習等としてだけでなく、親子間の絵本の内容の共有や触れ合いをする機会として、また、母親がゆつくりと過

ごすひとときとしても活かせるよう、子どもや母親への働きかけやプログラムの構成に工夫が望まれる。

他の母子や講師との交流については、「子どもとの関わり」と「他者との関わり」とを示す語の結び付きが強く、文脈からは、母親がママ友や講師と関わって情報交換や育児行動を学び、子どもとの関わりを深めていることも明らかになった。友人の支えを創出する親同士の繋がりを作ることに焦点化したプログラム（名須川・楠本、2011）の必要性が言及されているが、小グループにして会話を活発にしたり、自己紹介の場を設けたりする（加藤、2006）等、交流が促進される環境設定が求められよう。なかには、「緊張持続型」の母親のように、集団に入っていくにくい親子も少なくないと予想されるが、参加初期は親子の触れ合い遊びを増やして講座に慣れ親しめるような配慮が必要である。

本研究では、母親の心理的変容には一定の時間を要することも示された。子育て支援における質の向上と量的拡充の両方を進めること（内閣府、2017a）は急がれる課題であるが、年単位での質の高い支援を、より多くの親子に早急に提供することは資源や人材の面からも現実的とは言い難い。このため、たとえ数回の参加であっても効果を得られるように、支援の内容を的確に絞って実施が簡単に拡充可能なプログラムを構築、実施することで「乳幼児期から学齢期に繋がる切れ目のない支援」（文部科学省、2017a）の一端を担い、より多くの親子を園や学齢期の子育て支援・家庭教育支援へと繋げていくことが望まれよう。

## 註

- 1) KH Coder：内容分析（計量テキスト分析）もしくはテキストマイニングのためのフリーソフトウェア。http://khc.sourceforge.net/dl.html よりダウンロードできる。
- 2) 対象は、岡村（2016）と重複する。母親の語りを質的に分析した岡村（2016）に対し

て、本研究は、テキストマイニングによる量的分析から母親の心理的変容を明示する。

## 引用文献

- 秋田喜代美・無藤隆「幼児への読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の検討」『教育心理学研究』第44巻 1996 109-120
- Bandura, A. Self-efficacy: Toward a Unifying Theory of Behavioral Change. *Psychological Review*. 84 (2), 1977 191-215
- 千葉千恵美・渡辺俊之・平山宗宏・田島貞子「「親子ふれあい教室」が母親の気分状態に与える影響」『高崎健康福祉大学紀要』第8号 2009 37-48
- 樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版 2014
- 金岡緑「育児に対する自己効力感尺度(Parenting Self-efficacy Scale: PSE尺度)の開発と信頼性・妥当性の検討」『小児保健研究』第70巻 2011 27-38
- 柏木恵子・若松素子「「親になる」ことによる人格的発達—生涯発達の視点から親を研究する試み」『発達心理学研究』第5巻 1994 72-83
- 片桐咲恵・西村太志・古谷嘉一郎・相馬敏彦・小杉考司「子育て中の母親はどのようにして対人関係を拓げるのか?—「社会的代理人」利用状況の自由記述を用いた探索的検討」『山口大学教育学部研究論叢（第3部）』第66巻 2017 83-94
- 加藤邦子「子ども同士・親同士のつながり」加藤邦子・飯長喜一郎（編著）『子育て世代、応援します！—保育と幼児教育の場で取り組む“親の支援”プログラム』ぎょうせい 2006 pp.192-193
- 北山修「共視母子像からの問いかけ」北山修編『共視論—母子像の心理学』講談社 2005 pp.16
- 厚生労働省『地域子育て支援拠点事業について』

- 2017 [http://www.mhlw.go.jp/stf/seisaku\\_nitsuite/bunya/kodomo/kodomo\\_kosodate/kosodate/index.html](http://www.mhlw.go.jp/stf/seisaku_nitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/kosodate/index.html) (2017年8月13日閲覧)
- 丸谷充子「子育て支援者がとらえる親子の成長—子ども広場の子育て支援者へのアンケート調査から」『浦和論叢』第54巻 2016 89-105
- 松田茂樹『何が育児を支えるのか—中庸なネットワークの強さ』勁草書房 2008
- 文部科学省『つながりが創る豊かな家庭教育—親子が元気になる家庭教育支援を目指して』2012 [http://www.mext.go.jp/component\\_a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2012/04/16/1319539\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component_a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2012/04/16/1319539_1_1.pdf) (2017年7月9日閲覧)
- 文部科学省『家庭教育支援の具体的な推進方策について』2017a [http://www.mext.go.jp/component\\_a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/04/03/1383700\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/component_a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/04/03/1383700_01.pdf) (2017年7月1日閲覧)
- 文部科学省『リーフレット「つくろう！家庭教育支援チーム」—地域の力で家庭や子どもを支える』2017b [http://katei.mext.go.jp/contents4/pdf/H29\\_kateikyoiukushien\\_team.pdf](http://katei.mext.go.jp/contents4/pdf/H29_kateikyoiukushien_team.pdf) (2017年8月13日閲覧)
- 宗像恒次『最新 行動科学からみた健康と病気』メヂカルフレンド社 1996 pp.128-129
- 室谷雅美・中山徹「公民館で実施されている家庭教育支援事業の実態について—先駆的な事業を実施している公民館の事例」『日本家政学会誌』第64巻 2013 733-742
- 内閣府『子ども・子育て支援新制度について(平成29年6月)』2017a <http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/outline/pdf/setsumeimei.pdf> (2017年8月16日閲覧)
- 内閣府『平成29年度における子ども・子育て支援新制度に関する予算案の状況について』2017b <http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/administer/setsumeikai/h290130/pdf/s1-1.pdf> (2017年8月15日閲覧)
- 中谷奈津子「地域子育て支援拠点事業利用による母親の変化—支援者の母親規範意識と母親のエンパワメントに着目して」『保育学研究』第52巻 2014 319-331
- 名須川知子・楠本洋子「親育てプログラムの効果に関する研究—3年間の母親の子育て意識の変容を中心に」『兵庫教育大学研究紀要』第38巻 2011 1-8
- 小川晶『保育所における母親への支援—子育て支援を担う視点・方法分析』学文社 2014 pp.3
- 岡村幸代「子育て支援に参加した母親の子育て意識の変容—8名の母親の語りから」『家庭教育研究』第21号 2016 37-48
- 岡村幸代・平松清志「子育て支援における絵本の読み聞かせが参加者としての母親に与える心理的影響」『読書科学』第55巻 2013 1-12
- 岡村幸代・湯澤美紀「子育て支援に参加した母親の「子育て観」の時間的変容過程」『保育の実践と研究』第18巻 2014 58-66
- 大橋幸美・浅野みどり「育児期の親性尺度の開発—信頼性と妥当性の検討」『日本看護研究学会雑誌』第33巻 2010 45-53
- 齋藤堯幸・宿久洋『関連性データの解析法—多次元尺度構成法とクラスター分析法』共立出版 2006 pp.134-140
- 佐藤貢悦・巖錫仁・西中研二・平良直「日本における「家庭教育」の現状とその課題について」『家庭教育研究』第21号 2016 1-12
- 汐見稔幸「父親と育児」『母子保健情報』第20巻 1989 48-50
- 総務省『平成27年度 統計表公民館調査(公民館)』2017 <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001087262&cyclo=0> (2017年7月9日閲覧)
- 菅野幸恵「母親が子どもをイヤになること：育児における不快感情とそれに対する説明づけ」『発達心理学研究』第12巻 2001 12-23
- Stern, D. N., Stern, N. B., Freeland, A. *The Birth of a Mother, How the Motherhood*

*Experience Changes You Forever*, New York: The Miller agency, 1998. ダニエル・N・スターン、ナディア・B・スターン、アリソンフリーランド、北村婦美訳『親になるということ—新しい私の誕生』創元社 2012 pp.149

横川和章・小田和子「子育てサークルへの参加による子育て意識の変化」『兵庫教育大学研究紀要』第40巻 2012 19-27

頭川典子・北山秋雄「育児に悩む母親に対するグループプログラムの効果—母親の変化と家族関係の変化に着目して」『小児保健研究』第70巻 2011 371-379